



「海外で研究者になる  
—就活と仕事事情—」  
増田直紀 著

中公新書, 2019年6月  
253頁, 880円(税別)  
ISBN 978-4-12-102549-4

本書は、今後海外で研究職に就くことに関心のある大学院生、またそうでなくとも、研究者の就職や仕事の実情について日本と海外の比較に興味がある研究者にお勧めしたい本である。本書では特にPI(研究室を主宰する立場)の研究者に焦点を当て、就活の手引きと仕事の詳細が示されている。本書の特色は、著者の個人的な経験のみならず、実際に海外で活躍する研究者17人のインタビューを掲載し、多くの具体例が示されていることであろう。英語圏のみならず、アジア・ヨーロッパ諸国等、様々な文化背景を持つ国々の事例を紹介している点が興味深い。

本書の構成は、

第1章：海外の大学で働く？

第2章：海外PIになるには

第3章：17人に聞いた就活事情

第4章：海外の大学での仕事

第5章：大学教員生活のお国事情

終章：それぞれの道

となっている。第1章や第2章では、海外の仕事に応募する手順が、申請書の書き方などの具体例を交えて詳細に示され、関連する用語が説明されている。第3章では、17人の就活の実体験が個別にインタビュー形式で書かれている。次に第4章では、海外の大学教員の仕事の実情が、授業負担から研究費の獲得、昇進審査、大学業務、私生活とのバランスに至るまで、著者の経験を中心に語られ、第5章に17人による具体例が示される。終章では、国際化の進んだ昨今において、日本で仕事をしたいのか海外に出たいのか、多様な価値観の中でそれぞれの最適解を見つけることを奨めて、本書は締めくくられる。本書には気象学の研究者は登場しないものの、就活や仕事事情は共通する点も多いと思われるので、大変参考になる。

本書の著者は東京大学情報理工学系研究科で准教授を務めたのち、海外に転出した経歴を持つ。本書の執

筆当時はイギリスのブリストル大学で上級講師(日本の准教授相当)であったが、執筆と並行して本書に書かれた内容を実践して再度就活を行ない、アメリカのニューヨーク大学から内定を得て、異動するに至ったようである。

本書の帯紙には“日本の常識は世界の非常識?”と書かれており、日本の大学の仕組みが海外のそれとは異なることが、本書の随所で強調されている。就活に関しても、日本と海外では、応募者に求められる素質に違いがある。また、仕事と生活のバランスに対する寛容さも異なる。しかし、日本の様式が必ずしも否定的に捉えられている訳ではなく、その判断は読者諸氏の価値観に委ねられている。

本書を知ったのは、評者らが海外の研究機関に勤務していることから、日本気象学会の人材育成・男女共同参画委員会の委員長である京都大学の榎本剛氏より、本稿執筆のご提案をいただいたことがきっかけである。本書は異なる国々や研究機関の事情を比較するのに役立ったことに加えて、これまで断片的にしか知らなかった知識がよく纏めて書かれていたことも有り難かった。

ここで、評者らが所属する海外研究機関の特色についても付け加えておこう。小川の勤務するノルウェーの研究機関(ベルゲン大学地球物理研究所, GFI)に特徴的なのは、若い世代での男女比の逆転傾向である。ノルウェーでは一般的に、男女共同参画が進んでいるが、特に地球物理の分野における女性の活躍は顕著で、GFIにおいては学生の約60%が女性で、博士課程に限定すると55%が女性である。ポスドクになるとわずかに50%を切るが、おそらくいずれも日本と比較すると非常に高い割合だと思われる。また、GFIに所属する研究者の約半数はノルウェー人だが、残り半数は海外の国々から集まっているため、研究に関する会話はノルウェー語でなく英語で行なわれる。この点で、国際化が日本と比較して進んでいると感じる。

奥村は、アメリカの大学付属研究所(テキサス大学地球物理研究所, UTIG)でPIとして働いている。教員ではないので授業負担はないが、その分、研究費を多く獲得しなければならない。研究費の獲得は簡単ではなく、精神的な負担も大きい。自由に研究を進められる環境が気に入っている。研究員の男女比はノルウェーには及ばないが、国籍は様々であり、多様性が尊重されている。留学生を含めたアメリカの大学院生は、概して目的意識が高く、早くからPI就活を意識し

て行動していることに感心させられる。評者自身は、日本での指導教官の海外異動に伴い大学院留学し、そのままアメリカに残った。研究職や就活の実情を全くと言っていい程知らなかったので、無我夢中でここまで来た感がある。本書は、自身の軌跡を客観的に振り返り、今後を考える良い機会となった。

ポスドクの就職問題が取り沙汰されて久しいが、海外に目を向ければ様々な就職の選択肢がある。著者も

述べているように、海外でPIとして就職することは、正しく準備すれば決して不可能なことではない。本書は、海外での就活を検討し、準備する上で必要な情報を幅広く示した画期的な参考書である。本書を読んだ研究者が海外に目を向けることで、日本の大学の国際化を促進する一助ともなるだろう。

(ベルゲン大学地球物理研究所 小川史明,  
テキサス大学地球物理研究所 奥村夕子)